

大和川右岸の城連寺村と富田新田

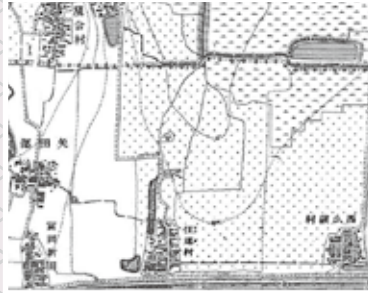
西田 孝司(松原市文化財保護審議会)



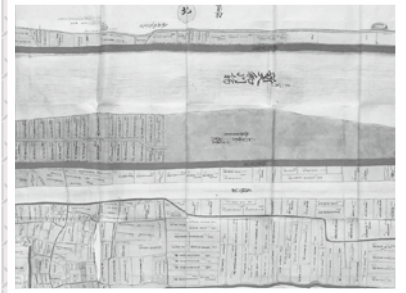
▲西浦池グラウンド南の大和川右岸から近鉄線や阿麻美許曾神社の森(左)をのぞむ



▲現在の大和川右岸・天美北周辺地図(松原市提供)



▲明治18年測量の大日本帝国陸地測量部の地図



▲享保14年「大和川掘鑿以後城連寺村々図」(天美北・長谷川正禮氏蔵)

大和川の改流で分離された市域城連寺村による富田新田の開発

宝永元年(一七〇四)、大和川が新しく松原方面に付け替えられた結果、現天美北の城連寺村の六割以上が新川の川底となりました。城連寺村では、その代替地が現大阪市東住吉区内の旧西除川筋などに与えられました。村では、農民たちが旧川筋に新しく田畑を開発し、富田新田とか城連寺新田とよばれました(「松原歴史ウォーク」29)。

右の絵図は、享保十四年(一七二九)に描かれた「大和川掘鑿以後城連寺村々図」です。新川の改流から二十五年の時を経た城連寺村の全域を示しています。村の北部を一〇〇メートル以上の流域幅を持つ「新大和川筋」が貫流しています。それでも大和川右岸の北側は、新川に分断されましたが、村域が東西に細長く残されていることが読みとれます。

大和川右岸側の堤下、今は廃線となった国鉄(JR)の阪和貨物線跡の軌道までが、松原市域最北部として、現在まで引き継がれています。近鉄電車が大和川の鉄橋をわたる矢田四号踏切道から東へ一キロ余り行った範囲です。北側は東住吉区住道矢田、東は平野区瓜破西に接しています。

享保十四年の絵図では、大和川の川底となって潰れた耕作地の北に続く田畑が描かれています。ただ、時代と

ともに狭山池から北に流れていた西除川が大和川に妨げられ、北流できなくなったことなどから、田畑も荒れていったのです。大阪市に接する同地は改流から三〇〇年以上たちましたが、対岸が松原市域であることを知っている方は、少ないと思います。しかし、大和川付け替えによる城連寺村の分断という歴史を受け継ぐ、貴重な絵図として、私たちはこの地に立ち、松原市域であることを認識したいものです。

次に、中の地図は明治十八年(一八八五)、大日本帝国陸地測量部が測量した現大阪市南東部の明治時代前半のもので、(二万分之一尺)の南の真下に大和川が流れ、先の右岸北側の城連寺村最北部までが範囲となっています。東から西瓜破村(現平野区)、住道村(現東住吉区)、矢田部(現東住吉区)の村名とともに、富田新田の村名も見られます。

城連寺や住道・矢田部は古代以来、富田庄とよばれ、共通のエリアでした。城連寺村の農民が村の北方に新田を開発したこと、以後、江戸時代を通して、城連寺村の枝郷富田新田として、本村の領域となっていました。

しかし、新田へは近隣の枯木村(現東住吉区)など他村からの移住などもあり、明治九年(一八七六)の人口を見ると、本村の城連寺村は三二二人に対し、富田新田は人口三三六二人と、上回っていました。そして、翌十年

(二八七七)、富田新田は城連寺村から離れ、一村として独立したのでした。

地図には、矢田部から南へ延びる下高野街道沿いに富田新田の街村が見られます。このすぐ南の大和川に架かる橋が下高野橋です。のち、富田新田は明治二十二年(一八八九)、矢田部・住道・枯木村とともに矢田村になるのです。

一方、城連寺村は大和川左岸の池内・油上・芝・我堂・堀村とともに天美村、のち松原市となり、江戸時代以来の城連寺村・富田新田間の行政上の結びつきは解消されたのです。

富田新田は、明治四十三年(一九一〇)、新田の名称を取り、富田となりました。以後、昭和三十年(一九五五)までは中河内郡矢田村大字富田、同年の大阪市合併後は、東住吉区矢田富田町と変更していったのでした。今では、同区矢田となっています。

左の地図は、現在の天美北周辺です。市域が大和川右岸北側で区切られていることがわかります。現在、大阪府が管理する西浦池グラウンド南側が境界です。明治十八年測量の地図には、住道村集落の西南に昭和五十年代に埋め立てられた北東に出っ張りのあるほぼ整形の西浦池が見られます。

江戸時代、明治時代、現代に至る絵図や地図から、市域最北部の天美北・城連寺の村域変遷が富田新田の歩みとともに、読みとれるのです。